

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

7

文選
注
上

黒澤翁満大人著

此書ハ早く世に廣まれるこやだまのしるべの中篇にて
そゆるておともの巻あれば世おあるらかめのでおをえ
もの數九を四百余めあるを益と出して其心を解あらし
哥字引て其用おやうを示されしるあめされば万葉集お人
おあるはあやあるは古今集お渡めをてねばあやある

言靈集

1926

中篇

おハ百人一着お衣はてしあやあるてふの類あや古説お解
ゆきさだして其心字誤れておをえやも其外おも猶以や
多くあるを始て委しく解あきらめられたるおれは古哥を
解おも自ら詠おも哥の事おうてらる輩ハ必お心得て
ハ叶えざる書あめ

阿豆麻園藏梓

初ノ父老に門人念ひつゝもてみらひけり哉
いふもろろりしはあやとてくおはし〜んん
流泉もあふまぬはあやとてあつ〜んん
こゝてあはれも〜んん別もあまのちになん
おきりけり〜んんあやとてあはし〜んん
共なる果て後も〜んんあはし〜んん
まはし〜んんあやとてあはし〜んん

あまのこゝろにふれまはるゆゆれは海令候は
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる

あまのこゝろにふれまはるゆゆれは海令候は
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはる

見たりとみらしに於ては是より其を論ずべしと
人無き未人の語に於ては是も獨りとして
たはれと誤るを和しむるは其の如くは
其に違ひなくして其の如くは其の如く
其の如くは其の如くは其の如くは
其の如くは其の如くは其の如くは
其の如くは其の如くは其の如くは

かあやうにわたりては其の如くは
その如くは其の如くは其の如くは
其の如くは其の如くは其の如くは
其の如くは其の如くは其の如くは
其の如くは其の如くは其の如くは
其の如くは其の如くは其の如くは
其の如くは其の如くは其の如くは
其の如くは其の如くは其の如くは
其の如くは其の如くは其の如くは
其の如くは其の如くは其の如くは

あましくせう用カ本也る紙をほり兼
学者流之れを連了といひ或七八五とし
或七九令五と一或は七八五と一如と程と
に法字ありて一おとをほりしは猶若き効記
ゆる七九の法紙簡書に一とてしるすは
るは若くふあは一猶も一海を如理
とてしるすは猶も一海を如理
とてしるすは猶も一海を如理

いふはくたはらわぬありては学者の悟
りやきく進之やけふとては未とて思ふ
ては若きとていひては詞はよく考はる
べきは、まゝといふは、猶も効記の
法字ありて一おとをほりしは猶若き効記
ゆる七九の法紙簡書に一とてしるすは
るは若くふあは一猶も一海を如理
とてしるすは猶も一海を如理

玉の緒も猶つづふぞや覚ゆるふしごとく無あしものつら
 ん成ふころれのれ本より学び浅く見る事廣くつら
 つら初学びの爲に見安くつら事をやつら今此
 書をゆくをさる也柳辞つら物詞の外別ある有
 るはつら云云を云云のあつら類の物を廣くさ
 して辞つらつら也是ハ常の詞つら異あして千萬の詞つ
 もの間をさつら其詞つら心のつら用をさ
 物あり譬ハ家居造つらつら物あつら如しつら
 ハ家居用つら物つら有つらも是無つら家成難し
 されハ家造つら爲つら未あつら如つら又本あつら如

し詞つら辞も則此類つら辞ハ常の詞の奴の如くあれつら
 又主の如く必無つら得あつら物あり此心をさつら先
 れハ調つらまき文つらまれ誤つら事常多し古言のつら
 つらあつらしを見つら必たるつら見過つらまじきあつら
 ハ今此辞つらもの有限を引出つら辞の巻つらそれつら心
 らつら古詞を引つら證つらし今の俗言つらつら解辨つら
 然しつらも上あつら云つら如く詞の用をさつら辞ハやつら
 詞あして詞の外つら有つらつらつらつら分つらつらも有
 きつら似つらつら總つら物を委つらつらつらつら種々の部
 を分つらつらつらつらつらつら安き物あつらつらつら是彼つら

卷を分ちて常の詞や言痛まざる分ちてあづみうとつ
多しゆらと

〇今こゝく辞の有限を出してそれご理を論ふ付てハ理も
ていふ然らざるゆき事の然云る證あき物あめ譬バて
めいふ辞あづみの如きてめい云うらうらうていふていふ
ゆもいふらゆく思わすれや然云うハ見當らざる也此類
ゆ多し詞のゆめきさるまふ昔ゆめわのづらゆい
もらゆらも有ゆく又廣くもゆめバ見ゆづる事の有も
又多らゆらゆしそハ見出さるむ人補ひてと

〇又右ふ云う同じ類ル理の上のみこそもゆらゆらや

あれゆも本らゆら辞の有ゆくもゆらゆ物も又多しを
ハ次々あづき其所々あも云て味ハ見了ゆし

〇同じ辞ゆらゆも其もらあざまふ従ひて心異ル聞ゆら
物多し其所々引了證誦等を味ひて委く細ル知ゆき也
今の世ふらゆら筋ル心を用うる人ハ一むきふあづみ
て古字の廣きを知らるる如く又大方ハむきふ心を用ぬ
ぞしてゆらゆらみづらゆらしく辞を誤る人多きをこし

〇同じ辞ゆらゆ中あも或ハおにきめの添てふきゆゆい
或ハてふましハの添てましゆ云う類ハ唯重なるのみふ
てまづ心ゆら別ふハゆらづれバ唯書のさるるのみふて

始ふゆづりてゆくゆく云々事も多きれば更ふ改先正さん
かきつればいふまじく又さまもあき事あれは
さる有あり人ゆやしむ事あり也

〇受る辞の格ハ上篇詞の活の所ハ云々又辞の結の事ハ是
も上篇詞の結の所ハ云々今此篇ハ唯辞の心を云々のみ
あれハ上篇ハ云々事ハもいふ見合を總の理
とさるる也

〇上卷も既ハ云々如く諸の伎藝ハ奥ゆらし中ゆらしハ
ゆ云々の有ハ本より賤しき俗意あれども其業ハ進む爲
ハ由無ふしも有ざれば此書ハ其筋ハたむむをいふ事

多しされハ上篇ハ表ハして此篇ハ裏也云々云々表の
いまじく見ゆる事までも守りて学ぶ有ざれば此篇
と見ても辞の心を解了筋々明らうあは惑をいふ也
しされ言靈の幽玄微妙ある境ハいふやきく理も押
極むゆらぬ物あれハ此篇ハいふゆも猶其奥ハ遠し
ゆ知深し奥深き境の論ハ始よりよく学びよく守りて
後ハ有ざれば中々ハ事を破る道と強う仲立も成はる
らん事無あしも有ざる也先此上中の二篇とも
初学ハいふ足るゆして有る也云々有る心の及ぶ限
てハ試ふ云々も学びの爲あれハ第三篇ハ至りて我國の詞

をの部

- 〇 せ 四のり
- 〇 せち
- 〇 せちや
- 〇 せち
- 〇 せち
- 〇 せち

をの部

- 〇 せ 五のり
- 〇 せち 六のり

- 〇 せだ 五のり

- 〇 せしち
- 〇 せしち
- 〇 せしち
- 〇 せしち

- 〇 せぬ 五のり
- 〇 せん 六のり

もの部

- 〇 せぬ
- 〇 せえ 七のり
- 〇 せや 七のり
- 〇 せうし

- 〇 も 八のり
- 〇 もこそ 十のり
- 〇 もら 十のり
- 〇 もん
- 〇 もの 十二のり

- 〇 せ 六のり
- 〇 せも 七のり
- 〇 せち
- 〇 せぬ

- 〇 もを 九のり
- 〇 もや 十のり
- 〇 もら 十のり
- 〇 もん 十のり
- 〇 もん
- 〇 もん

のれ部

〇 のろ 十一のり

〇 のろ

〇 のろみ 十四のり

〇 のろ 十四のり

〇 のろ

のり部

〇 のり 十五のり

〇 のりも 十七のり

〇 のりや 十八のり

〇 のりふ 十九のり

〇 のり

〇 のり 十六のり

〇 のりふ 十七のり

〇 のりし 十八のり

〇 のりみ 十九のり

〇 のりめ 十九のり

やの部

〇 やら 十一のり

〇 やら

〇 やら 十一のり

〇 やらふ 十二のり

〇 やらん

〇 やれ

〇 やね 十二のり

〇 やめ

〇 や 十四のり

〇 やぞ 十六のり

〇 やも 十七のり

〇 やめ

〇 やふ

〇 やえ 十六のり

〇 やらん 十六のり

〇 やふ 十七のり

〇 やめ

ハの部

- ハ 二十七のウ
- ハ 二十九のウ
- ハ 三十一のウ
- ハ 三十三のウ
- ハ 三十五のウ
- ハ 三十七のウ
- ハ 三十九のウ
- ハ 四十一のウ
- ハ 四十三のウ
- ハ 四十五のウ
- ハ 四十七のウ
- ハ 四十九のウ
- ハ 五十一のウ
- ハ 五十三のウ
- ハ 五十五のウ
- ハ 五十七のウ
- ハ 五十九のウ
- ハ 六十一のウ
- ハ 六十三のウ
- ハ 六十五のウ
- ハ 六十七のウ
- ハ 六十九のウ
- ハ 七十一のウ
- ハ 七十三のウ
- ハ 七十五のウ
- ハ 七十七のウ
- ハ 七十九のウ
- ハ 八十一のウ
- ハ 八十三のウ
- ハ 八十五のウ
- ハ 八十七のウ
- ハ 八十九のウ
- ハ 九十一のウ
- ハ 九十三のウ
- ハ 九十五のウ
- ハ 九十七のウ
- ハ 九十九のウ
- ハ 一百のウ

ホの部

- ホ 三十のウ
- ホ 三十一のウ
- ホ 三十二のウ
- ホ 三十三のウ
- ホ 三十四のウ
- ホ 三十五のウ
- ホ 三十六のウ
- ホ 三十七のウ
- ホ 三十八のウ
- ホ 三十九のウ
- ホ 四十のウ
- ホ 四十一のウ
- ホ 四十二のウ
- ホ 四十三のウ
- ホ 四十四のウ
- ホ 四十五のウ
- ホ 四十六のウ
- ホ 四十七のウ
- ホ 四十八のウ
- ホ 四十九のウ
- ホ 五十のウ
- ホ 五十一のウ
- ホ 五十二のウ
- ホ 五十三のウ
- ホ 五十四のウ
- ホ 五十五のウ
- ホ 五十六のウ
- ホ 五十七のウ
- ホ 五十八のウ
- ホ 五十九のウ
- ホ 六十のウ
- ホ 六十一のウ
- ホ 六十二のウ
- ホ 六十三のウ
- ホ 六十四のウ
- ホ 六十五のウ
- ホ 六十六のウ
- ホ 六十七のウ
- ホ 六十八のウ
- ホ 六十九のウ
- ホ 七十のウ
- ホ 七十一のウ
- ホ 七十二のウ
- ホ 七十三のウ
- ホ 七十四のウ
- ホ 七十五のウ
- ホ 七十六のウ
- ホ 七十七のウ
- ホ 七十八のウ
- ホ 七十九のウ
- ホ 八十のウ
- ホ 八十一のウ
- ホ 八十二のウ
- ホ 八十三のウ
- ホ 八十四のウ
- ホ 八十五のウ
- ホ 八十六のウ
- ホ 八十七のウ
- ホ 八十八のウ
- ホ 八十九のウ
- ホ 九十のウ
- ホ 九十一のウ
- ホ 九十二のウ
- ホ 九十三のウ
- ホ 九十四のウ
- ホ 九十五のウ
- ホ 九十六のウ
- ホ 九十七のウ
- ホ 九十八のウ
- ホ 九十九のウ
- ホ 一百のウ

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*
五十一の五

びんの部

○ *びん*
五十一の五

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

○ *びん*

びんの部

○ *びん*
五十一の五

○ *びん*
五十一の五

○ *びん*
五十一の五

○ *びん*
五十一の五

○ *びん*

○ *びん*

- 〇 志五十四のひら
- 〇 志五十五のひら
- 〇 志五十六のひら
- 〇 志五十七のひら
- 〇 志五十八のひら
- 〇 志五十九のひら
- 〇 志六十のひら
- 〇 志六十一のひら
- 〇 志六十二のひら
- 〇 志六十三のひら
- 〇 志六十四のひら
- 〇 志六十五のひら
- 〇 志六十六のひら
- 〇 志六十七のひら
- 〇 志六十八のひら
- 〇 志六十九のひら
- 〇 志七十のひら
- 〇 志七十一のひら
- 〇 志七十二のひら
- 〇 志七十三のひら
- 〇 志七十四のひら
- 〇 志七十五のひら
- 〇 志七十六のひら
- 〇 志七十七のひら
- 〇 志七十八のひら
- 〇 志七十九のひら
- 〇 志八十のひら
- 〇 志八十一のひら
- 〇 志八十二のひら
- 〇 志八十三のひら
- 〇 志八十四のひら
- 〇 志八十五のひら
- 〇 志八十六のひら
- 〇 志八十七のひら
- 〇 志八十八のひら
- 〇 志八十九のひら
- 〇 志九十のひら
- 〇 志九十一のひら
- 〇 志九十二のひら
- 〇 志九十三のひら
- 〇 志九十四のひら
- 〇 志九十五のひら
- 〇 志九十六のひら
- 〇 志九十七のひら
- 〇 志九十八のひら
- 〇 志九十九のひら
- 〇 志百のひら

志の部

- 〇 志五十八のひら
- 〇 志五十九のひら
- 〇 志六十のひら
- 〇 志六十一のひら
- 〇 志六十二のひら
- 〇 志六十三のひら
- 〇 志六十四のひら
- 〇 志六十五のひら
- 〇 志六十六のひら
- 〇 志六十七のひら
- 〇 志六十八のひら
- 〇 志六十九のひら
- 〇 志七十のひら
- 〇 志七十一のひら
- 〇 志七十二のひら
- 〇 志七十三のひら
- 〇 志七十四のひら
- 〇 志七十五のひら
- 〇 志七十六のひら
- 〇 志七十七のひら
- 〇 志七十八のひら
- 〇 志七十九のひら
- 〇 志八十のひら
- 〇 志八十一のひら
- 〇 志八十二のひら
- 〇 志八十三のひら
- 〇 志八十四のひら
- 〇 志八十五のひら
- 〇 志八十六のひら
- 〇 志八十七のひら
- 〇 志八十八のひら
- 〇 志八十九のひら
- 〇 志九十のひら
- 〇 志九十一のひら
- 〇 志九十二のひら
- 〇 志九十三のひら
- 〇 志九十四のひら
- 〇 志九十五のひら
- 〇 志九十六のひら
- 〇 志九十七のひら
- 〇 志九十八のひら
- 〇 志九十九のひら
- 〇 志百のひら

んの部

○ん 六十のひら

○んも

○んや

○んえ

○んう

○んあん

○んしも

んの部

○んが

○んか

○んを

○んふ

○んうし

○んこそ

○んぞ

○んや 六十のひら

○ん 六十のひら

るの部

○るとも 六十のひら

○るろ 六十一のひら

○るが

○るめ 六十のひら

○るれ 六十一のひら

○るが

○る 六十二のひら

○るふ

○るも

○るや

○るぞ

○るあん

○るえ

○るを

○るが

○るう

○るこそ

○るらん

〇 ころし

〇 ころめ

〇 ころめ

〇 ころし

〇 ころも

れの部

〇 れ 六十二のひら

〇 れや 六十二のひら

〇 れぢ

〇 れぢ

〇 れぢ

〇 れら

〇 れぞ

〇 れこそ

らん部

〇 らん 六十五のひら

〇 らん 六十五のひら

〇 らんや 六十六のひら

〇 らん 六十六のひら

〇 らし 六十六のひら

〇 らんし

きり部

〇 きり 六十八のひら

〇 きり 六十八のひら

〇 きり 六十八のひら

〇 きり 六十八のひら

〇 きり 六十九のひら

〇 きん 七十のひら

〇 きり 七十のひら

〇 きり 七十のひら

〇 きり 七十一のひら

〇 きり 七十一のひら

〇 きんし

〇 きりし

きり部

○ *た* 七十三の五

○ *ち* 七十一の五

○ *ち* 七十五の五

○ *ち* 七十六の五

たの部

○ *た* 七十三の五

○ *ち*

○ *ち*

○ *ち*

○ *ち*

○ *た* 七十三の五

○ *ち* 七十四の五

○ *ち* 七十五の五

○ *ち* 七十六の五

○ *ち*

○ *ち*

○ *ち*

○ *ち*

○ *ち* 七十三の五

○ *ち*

○ *ち*

○ *ち*

○ *ち*

○ *ち*

たの部

○ *ち* 七十三の五

○ *ち*

○ *ち*

○ *ち*

○ *ち*

○ *ち* 七十三の五

○ *ち*

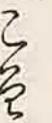
○ *ち*

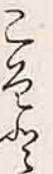
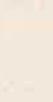
○ *ち* 七十九の五

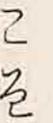
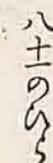
○ *ち*

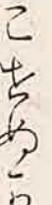
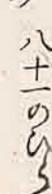
○ *ち*

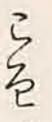
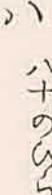
たの部

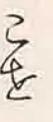
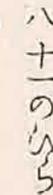
〇  七十九のさゝ

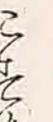
〇  

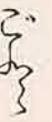
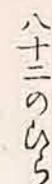
〇  

〇  

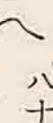
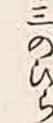
〇  

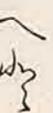
〇  

〇  

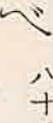
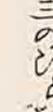
〇  

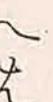
入の部

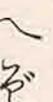
〇  

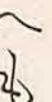
〇 

〇 

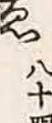
〇  

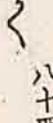
〇 

〇 

〇 

入の部

〇  

〇  

入の部

〇その部

花 ハナ 花の心 ハナノココロ さくさく サクサク 歎 ナガメ く心 ココロ とねびて物 モノ おまを事 コト ふまれ有 アル ぞ中 ナカ
 りり撰 ヒラキ 分 ワケ るやうの心 ココロ 持 モチ 了 ナリ 辞 ハナハナリ 也古今 コノイマ ニ故郷 コノサト せ成 ナリ ありあらの
 都 ミヤコ 亦 モト 色 イロ いろ イロ ち チ ら ラ ざ ザ 花 ハナ の咲 サキ き キ め メ 同 ドウ 四 シ つ ツ の ノ 心 ココロ 分 ワケ れ レ ぬ
 秋 アキ の夜 ヨ を物 モノ 思 オモ へ ヘ る ル の限 カギ 也 ナリ 昔 カキ 同 ドウ 里 サト の心 ココロ 分 ワケ れ レ ぬ ノ る ル り
 あ ア し シ 宿 ヤド あ ア せ セ や ヤ 庭 ニハ も モ ま マ ぐ グ さ サ も モ 秋 アキ の野 ノ ら ラ あ ア る ル 同 ドウ 五 イ 秋 アキ の ノ 來 キ め メ 紅 ベニ
 葉 ハ の宿 ヤド 降 フリ し シ き キ め メ 道 ミチ 踏 フミ 分 ワケ る ル 人 ヒト の ノ あ ア し シ 同 ドウ 一 イチ 深 フカ 山 ヤマ の ノ 松 マツ
 の雪 ユキ 消 キエ へ ヘ 都 ミヤコ の ノ 野 ノ 辺 ノヘ の ノ 若 ワカ 菜 ナツメ 摘 ツマ ぎ ギ め メ 拾 ヒラ 遺 ツケ へ ヘ 心 ココロ 分 ワケ れ レ ぬ ノ せ
 ひ命 イノチ の ノ 限 カギ あり アリ 物 モノ を ヲ 恋 コヒ へ ヘ 志 ココロ 違 ヒ へ ヘ 人 ヒト の ノ つ ツ き キ あ ア へ ヘ 是 コレ 等 トウ あ ア へ ヘ 大 オホ 方 カタ
 其 ソノ 心 ココロ を ヲ 味 アジ へ ヘ 用 キチ へ ヘ る ル 心 ココロ 異 コト あり アリ 如 ゴト

〇言靈のあはるべ

〇中一

聞ゆもろきやうひもてゆきば一ふ落先ゆ又唯軽く添
 うのみあふ心無が如聞ゆるも多うめ何ぞい何やい何うい
 いづらひ。云云こそい。云云うめい。云云むいあやみの類也。う
 やうのそい除き去ても同じ事あるを思ふは是歎のこと
 あれば成屋し今の世の俗言あも物事ふ付東人のこゆるむふ
 あり則是あり此俗言のちあ東人のこゆるむふ
 多し

もいおふ歎く心のも。添うる也。ささむいひあれ
 一の辞の如く成り物を強うい入る歎く心をもちしめ
 宜長の説ふおもい恋慕ひる志心有るゆえりお哥のやう
 免ふおまきいさも聞ゆれやも中らのいさひきこえぬがう
 古事記若橘姫の詩ふ問し君いもや有を始る萬葉四我

名いも子名のいほおふ立ぬやも云云同思ひて有し我見い
 もいれれ同五盈いもあけうい暮し夜いもいあづき明し云
 云同ニ鷺の宮いも同三やいし君いもあやむ多し古今十
 あり草のそつうお見えし君いも同十本らごちゆく我盛ハ
 も同ニわさの朝けの霜の降いもあやむある是也今の俗言ふ
 たる時をむをあもくやれけく事
 あり此よこあまのあはるは

おれし次お引る詩詞をも味ふは宣長ハ深く歎く心也
 無く求る心古事記倭建の命の御詞おらづまのやや見え
 同御詞あり其太刀のややあり又崇神天皇の条の詩ふみま

あゆみびこりや日本紀雄略天皇の御卷の詞ふいしたく
 みのやつらたきみのや拾遺六君が住宿の楸のゆりく
 隠るまが小返り見しいや六百番誦合八十伴の男もい
 めさきいやあを見えたり是又今の俗言ふいやを
 ぞをそをいむをりを受うるその方強し萬葉六たも
 やほり我いを恋る云同我いをまづる云同我いを恋
 る君がむづを

そい詞の間ふ在り上の詞の心を下へおとげは辞也又兼
 て未來の心をむびり續けふりて然らぬもけさむ恋
 恨見似似榮得るあや体言より直受るも思ひ

さうるほし叔又宣長の説小むい既然事をいふ未然
 らざる事をいふの二あり其既然事をいふい心
 小相對ひ未然らざる事を兼ていふい心小相對へ花
 さけい花さけい心花さい心花さい心あやの如しや云る
 いたる事也猶此既然事未然らざる事のけち先い
 詞の活の卷小委々云るを見ていふわく思ひ明らむほし古
 今一年あまいよをいい老ぬ然いあれ花を見まば物思
 ひもあ後撰六時雨降ふい心人小見せもあく交ちりれ
 惜みをれる秋菽のやい心二重ねうるもい心志る心
 心をあやの類のい心皆同し事あり

ふ心あり異ある事けしきやしも中ふいのこやふ心聞申
 るもあや伊勢物語今日むつめやを田鶴も鳴ある後拾遺
 八今朝むつめふふあやの類也猶のみの所尔云るや引合せ
 見る法

〇をの部

をい總て身尔受入るやうの心志する辞也答言ふを
 此故成法し日本紀ハ唯々やあるを始て古書ハハハ
 又尔に相對り少警ハ妹尔こいハ彼方牙つり出さる心
 妹をこいハ此方牙引とさるおまむ氣あり是あて大方をの
 心をさゆる法し古今十人の身も習ちし物をあはせし心

ぶらうる五人恋や志ゆるや同六矢づらうる聲あはぬく小
 時鳥ころの年をわつても有哉後拾遺ハ都出る今朝むつめ
 りふふとつりあも逢見て人を別をさしうバあや其用あづ
 戸小ふりて少しづ心異あるが如聞ゆあめう味ふ法し
 古今秋萩の花をむ雨ふめらせやも君をばましてさしや
 こも思ふうく二重をさるもつり

〇その部

その行勿來勿あやふ法あ勿を上りあがらして勿行を
 勿來をゆるふ下り添了是也ささバ此類の詞ふのみ限る

るしゆあて常の辞やい異あり又萬葉七妹がけりし我袖ふ
 らむ木の間にあり出たる月尔雲ふ桐引同七家あしやあむび
 我せこ云云あやそを略るも是彼多きをいそいひや軽
 添ふる物ある事を知ほしさをやいひおさきて心強うらむ
 るやうのい聞ゆ古今一春日野の今日りれやまを若草のり
 まもこのをりめ我もこのをりめ

そね ぞねい上る云るそふねの添ふる也ねい願ふ心のてか
 そそあまむ心ひく強ふふ似うり萬葉ニ夕子あありそね
 同野辺の秋萩ふ散そね同七柴あうりそね同九雨あうりを
 ね同叶雪あうりそねあうりあうり多し

そや そやの歎のや文字の添ふるおて上小異似る事あし重
 文集千早振ひびくの宮の神の駒ゆたれのりそやうりも
 ぞあま

そ 是の歎のら。文字の添ふる也さきばそやもそらも全
 同くして心を深うらむるふ似うり萬葉叶ねもそらふあ
 恋そらあを云云源氏若菜下の詞つるりあり事あつる
 ひそら云云

そ ぞい物と限て狭くさし又物を手取入るが如き心の辞
 あり又や小相對りり誓ふバ彼や是や彼を是ぞあやの如し
 やい驚くさして心そい古今九北行雁を啼あうりも
 狭くさして心味さし

て來し數のたらでそ歸る侍らある拾遺一物も心そであが
 先とぞあつ山吹の花ふ心そくつるいめらむ同七面影ふ
 衣しの見ゆる君あま恋し事の時そあもあま堀川百首
 秋風ふあびく尾花を夕暮誰が袖そあやまをけり
 あま重ねるもあや又後撰九淺してふくをゆるし多山
 の井のほりし濁ふ影い見えぬを拾遺十銀の目貫の太刀を
 さげをきて奈良の都をわりの誰が子を萬葉七春花の移ふ
 まで不逢見ぬバ月日よみり、妹待らんを同叶柳こそを
 ばもえこれ世の人の恋ふ死あんをいふせよあを彼
 是用のふる異あるが如聞ゆるあや大方是あてその心を思

い渡をばし

をそといそふとの添ふるあめさそバといひゆ輕くて心

もあまが如し則俗言ハ云六帖白妙の夜うらさ春日野ふ

若菜摘しも誰が為ふそと同誰ふりり思ひみごとく心を

あまぬを人のつらさあめらる古今ハ歸る山何をとあめり

つらういひ來ても留らぬ名ふこそ有はれ

ももい大方をえふ同い俗言ハ歎の聲ある則らさあり古今一

色なりも香こそあそ思ほゆき誰が袖ふきし宿の梅ぞ

も後拾遺四いそ飛つ我こそ來つむ山里ふいつより先

る秋の月ぞも萬葉三あそをぞも我ふらるやふ我をぞもあ

受ふ事なるやふ云

【を】をやは是又かいはもふ大方同じやの俗言小やあや云歎の聲ある則是あり

拾遺セのさりせし海人のとしへしつづくそや嶋廻やそ有

やつひしの新勅撰三のありし時そや夢ふ見し事ハ夫ハ

可小こそ忘らむ小けは源氏總巻つづそやも花の盛小一目

見し木の木さすや秋いさびくそ後撰十大方ハあそや我名

の惜つゝむ昔の妻や人小語らむ詞花ハ浅ぢふ小今朝置露

のさむけく小かきふ一人のあそや恋しそ是ホ例の用あり

さ小よりて聊異あるが如聞ゆはそや皆同じ事也考了渡を

ほし叔宣長の説小總て何れもあやの類の詞の下ハ皆あり

受る例ある小唯あをやあやの二のそやや受る例あり其

内小あやいこのや受るが多くしてやや受るハ稀也あそハや

小受る例のみあてこのや受る事あしやあハハハ大方世

の人あそあやを一の詞の如思ふいひがくや也何や云をあ

てふや云如く何のふと略る物あてあをのそもあやのやも

皆辞也ささばそよりこのや受る事本より有ほくもつづぶる

そや又あやのやを濁るもあそハ猶此事ハの部小云ほし

〇もの部

【も】もいりやとあぶるのりして聊歎く心持る辞也ささば是

も彼もあや物の添ふ事小用るも此心む可也又暑しも寒し

もあやふもい歎のみわて心無が如し是則俗言物事小
 あふふ同 萬葉叶東路の手児のらび坂越兼て山ふらわむも
 宿ありあしふ古今五十あしぼり雲井をさして行鷹のいや
 遠ざりて我身悲しも後撰五是や此行も帰るも別途つ知
 もあふむ逢坂の関後拾遺四秋も秋今宵も今宵月も月所
 も所見了君も君同叶白露も夢も此世もまほらしもいふ言
 て云バ久しうりけり六帖をゆくしも去年も今年もをゆく
 ひもさめふもけふも我恋る君あやふも多し重ねるも云め
 又萬葉ふい今日も明日もあふ云るも多しあふ二
 歎の如ふ唯今日サテマヒトクサ 扱又一種のもありあふんの通るあり
 明日の如ふ心あり

凡古言の云ん写んあやのんも正しくむや云めしうらもあ
 い殊尔近く通る成ほし萬葉十人目多みたがふ逢てけづ
 しくも我恋死あべ誰が名あふあふも同ニよそにのみ見
 や渡らもあふとづ雲井あ見ゆる鴛あらあふ小千載四人
 もうあ見せも聞せも萩が花咲夕影の日暮しの聲但此詩ハ
 せもせんやふ心と云残しうらあも聞ゆ則千五百番
 哥合小本あらの萩の下根小鴉虫の声を誰小見せも聞せ
 も又六百番哥合小雪うづむ松とみやり小吹うすし見せも
 聞せも山あらしの風やあふ二首やも小千載の哥あふら
 て詠る物あづら六百番の方い見せも聞せもあふら
 小見せも解づら然るを直長の菅家萬葉あふらあふら
 小郁子羊少書まもと店や書蜻蛉日記あふらあふらあふら
 小んや有報多し是ホんやも通ふ例あふらあふらあふら
 哥と誤やあふ今い其説小りりて引くよあふ思ふ小萬葉の
 古言の其後の絶て聞えぬあふらあふらあふらあふらあふら

着の多ありし事もおぼろけなく其上此哥主の和泉式部
れは女の口よりいまだ心づかぬや 覺ゆたや 心づかぬ
來りし事ありし心づかぬの流を安き當時の詞づきの心づかぬ
やと思ふも猶云殘しの心や見ん方おぼろけあるはくや
よく考ふはし



もていもいりてや受くる世その事を限るは強

辞あをねもものあぶらうあつたに相添るをば未來の事を云

るの自疑いあやぶむやうの心をあびりてをばその過去

や未來のけら先あそ然聞ゆるふこそ何を本より別の心は

あそあそあ次不引る詩やもあそ辨ふはし上の一首の過

來の方あり萬葉一立て思ひ居てもを思ふ紅のほろもを

引ひわし姿を後撰五天の河流をて恋はうくもをあるは

れや思ふせふをやく見ん同計ありぬやを思ひも捨じこら
ころもをそあてはやあ恨もをそ

もこそいものあぶらうあつたに強多う添

あをば其心大方もを同じ次不引る哥上の四首の未來の

味ふはし古今ニ花見まば心さすふそうつりける色は出

し人もこそ知を同今宵來む人あを何をば柵機の久しき

程小待もこそをこれ後撰九人の上の事やしは子ば知らぬ哉

君も恋をそをりもこそ何を拾遺ニ身ふこそをばあく花

を惜む哉はけらば後の春もこそあれ同玉ぼらの遠道も

こそ人へ行あや時の間も見ぬば恋を古今に現るは

もてもての正しくは言はもちて也ナリこそもつむもちもつも
 てわく活イダシく詞コトめて本モトの手テして物モノと持事モツコトありそをさうり移ウツめて
 身ミ持心ココロ持モツあや常ツネふハふハりさハさハば本モトらり辞エテハふハてハりさハさハ
 かも軽カヨく用キタの削シてあてやハいハ辞エテハの心ココロふ添ソクて用キタる事コト常ツネあり
 則スレバもちてやも云イハり萬葉マンヤク三我袖ミカソデもちてつくさんと云イハ云イハ同ドウ石
 もちて云イハ云イハ同ドウ何物ナニモノもてつ命イハチつづまハしあやの類ルビありささ
 ば本モトの持事モツコトらり移ウツめて辞エテハの如カドくふもあさる物モノ故唐コトカラぶハの
 以ヨリの字ジふも此訓コトバを付ツケる也ナリささるを文字モノにのみあづかると是
 の持モツの字ジの心ココロ是ナリ以ヨリの字ジの心ココロあや異物コトモノのやうふハ漢カラ
 心ココロふて論イハふふ足タらハ交マ

ものものい本モトらり辞エテハふハりさハさハば本モトらり辞エテハふハてハりさハ
 ことば爰ココふ出デしつハ扱詞セキゴトのやむ先マ置オキるハ大方オホカタとや云イハふ
 同じ萬葉マンヤク四我持シカモツ三ミ相アイふハささる糸イトもちてつツきキてあしもの
 心ココロまごころやハ同ドウ五イハチ夫ウツやぶや鴈カガむもハづもや都ミヤコまハでおハくハ
 まをマして飛トビうハるもの古事記コトバの詩ウタふ持モツてこまハしものハささ
 るものあやも見ミえり又マタを添ソクて物モノとやいハ常ツネの
 事コトれり扱セキ又マタ扱セキうハるものあやの類ルビふものハふ事コトを加カへても
 のゆゑものうらものハやうふ云イハる詩ウタ多オホクし古今コノイマ四秋シキウあら
 で逢事アヒコトうハき女メ郎ヲ花天ハナテンの河原カハラふあハいぬものゆゑ同ドウ十恋ジュコヒを
 色イロば我身ワカミの影カゲや成ナリふハきめさハりやうて人ヒトふハさハるぬものゆゑ同

三時鳥汝が啼里のほまゝあまは猶うやまきぬ思ふ物うら
 同五 天雲のそをあも人の成ゆくささるる目お見ゆる
 ものうら同叶空をふの世の人ぶりのまきうきば忘る物
 のうきぬけらあり伊勢物語君來んやいし夜毎ふ過るま
 ば頼まぬもの恋つぞぬる此類皆心の裏るるる如く
 に首より誰もたきもいふ事あるやも然らば委くあづらの
 所ふえろを見らば

〇此の部

のい言を續る辞あり又言を略きて心を續るもりのさ
 其用のぶまふりて重なり軽なり其重なりづ相

通すり譬は萩の花萩の花あやの如し又今の世ふいの水
 流るるも多くふや云習するらめ鶯が鳴花が咲あやの類最
 最多しうやりの此を則重なり方ふいりりるる左ふ引る詩
 かもみり其大方を辨ふはし部小委し引合を見らば萬葉
 三菴むらの清見の崎のふけの浦のゆふ見えつ物思ひ
 もあし古今ニ今もうも咲あはふらむ橘の小嶋の崎の山吹
 の花同叶吹まらふ野風を寒ふ秋萩のうつりも行る人の心
 の源氏螢あはるるていづい浅くも見ゆるうれりやあもふ
 り文あつてきるぬの古今叶君や來ん我や行人のいづらふ
 ふまありの板戸もさう文あふきり新古今叶有明の月をうめ

こそ通ひききとる人あしの宿の庭も古今十吉野川岩波
 高く行水の早とそ人を思ひそ先てし同夕月夜をや岡辺
 の松の葉のつりやもわらぬ恋もまさ哉千載十大方の恋を
 人不聞別て世の常のやも君思ふらむじ好忠集人妻やまの
 のや二思ふおの別來し袖はらもれまささり古今二君恋る
 泪の床ふみもちやまいみをつくしやを我の成きる同仁をく
 ろさやみつの小嶋の人あらば都のつやみさやまをまし
 を同叶空蟬の世の人こやの志ききの忌きぬものこうれ
 ぬ傍らあり詞花ニ鳴聲も聞えぬ物の悲しまい忍びふもゆ
 ろ虫ありまり是等用めがらふらりて心異れ

ろご如閑ゆ見渡して味ふ傍し
 えやみふ心を含みり又好忠集あるまの葉のつふのの如
 俗言おの常心を含みり又好忠集あるまの葉のつふのの如
 本の人奮ふ也や有此が則るかのの小雷をバの文字一の
 まゆていうご小聞ゆらて此事を猶よく考ふ千載ふ世の
 常のややらるい世の常の恋ややらるをのお一字
 小其心を持きる物也俗小我の物人の物やらる事を我の
 人のやのみえが如し源氏物語あらふ君の御哥やは法を
 君の御やのみえる事もらら小心を了似ゆりさまば好忠集
 あるも本に我のや書てらるのありきんを後に我の字をま
 ろの訓あらるりり假字不寫し誤をるふもらる傍しまらぬ
 ちのあらずしらず誤をる事外も多し又物のやあらぬ
 小裏すらずりて其心を異あり猶此事のあらる所小
 合を見る傍し



のやの小歎のやの添つるあやの以や輕しまさや
 直小みひついとるやいらすらじ日本紀何ふみ

のやきれのわくごがえ 萬葉ニ以たるみのや高角山の云
同叶みあやのや蘆中ある云 古今ニ近江のや鏡の山を
云 六帖河内のやうし家山の云 堀川百首錦のや叙
く花や見ゆる哉云

ののみの物を限り以ふ詞にして夫の_レみ是の_レみあや常
以ふふ異ある事あしふと_レ辞_ハハ_レ何れやも辞_ハ近
ともて爰不出たり_レ扱_ハわ_レりや互_ハ似_ハ通_ハひて_レ聞_ハゆるも多し
古今ニ我_ハ恋_ハ行_ハ方_ハも_レ知_ハら_レ果_ハも_レあ_レし_レを_レ限_ハり_ハや_ハあ_レも_レふ
わ_レり_ハを_レ同_ハ津_ハの_レ國_ハの_レあ_レを_レ思_ハを_レ交_ハ山_ハ城_ハの_レや_レを_レあ_レ見_ハん
事との_レみこそ_レの_レ類_ハ也_ハと_レを_レめ_ハを_レわ_レり_ハ其_ハ程_ハを_レ以_ハふ_レ詞_ハの_レみ_ハ

夫_ハ限_ハを_レ心_ハお_レて_レ本_ハら_レり_ハ同_ハじ_ハう_レら_レ又_ハ古_ハ今_ハ五_ハ山_ハの_レ井_ハの_レ淺_ハ
き心も思_ハを_レぬ_ハを_レ影_ハを_レり_ハの_レみ_ハ人_ハの_レ見_ハゆる_ハむ_ハや_ハう_ハあ_レふ_ハ
初_ハ重_ハぬ_ハも_レ有_ハあ_レり

○かの部

ここハ人_ハ物_ハを_レ問_ハう_レる_ハを_レ本_ハわ_レて_レ自_ハの上_ハも_レ物_ハの_レめ_ハき_ハ
ふ_ハあ_レつ_ハう_ハふ_ハ辞_ハ也_ハと_レを_レバ_ハ大_ハ方_ハや_ハ同_ハじ_ハく_ハして_レ疑_ハひ_ハの_レ心_ハや_ハ
ゆ_ハり_ハも_レ強_ハし_ハさ_レる_ハ故_ハあ_レや_ハ互_ハあ_レ通_ハを_レし_ハ云_ハも_レ多_ハき_ハ也_ハも_レ又_ハ
必_ハこ_ハの_レや_ハ以_ハふ_ハ倍_ハを_レ必_ハや_ハ以_ハふ_ハ倍_ハを_レさ_レぶ_ハこ_ハ分_ハを_レさ_レす_ハも_レ
多_ハし_ハみ_ハづ_ハり_ハあ_レら_レふ_ハ倍_ハう_レら_レ又_ハ譬_ハバ_ハ何_ハる_ハこ_ハあ_レき_ハこ_ハ見_ハゆる_ハこ_ハ
聞_ハゆる_ハこ_ハ何_ハり_ハや_ハあ_レし_ハや_ハ見_ハゆる_ハや_ハ聞_ハゆる_ハや_ハあ_レき_ハの_レ如_ハく_ハ續_ハく_ハ詞_ハよ

是ハハ。心受切。詞。ゆり。ハ。ヤ。心受。事。是。大方。の。格。也。猶。詞。の
 切。續。の。事。ハ。詞。の。活。の。卷。ル。委。々。云。る。を。見。合。き。て。准。ら。ず。知。信
 し。扱。ハ。も。用。わ。ざ。り。と。さ。ぐ。り。後。撰。ハ。物。思。ふ。心。過。り。月。日
 も。知。ら。ぬ。間。ル。今。年。も。今。日。ハ。お。と。と。ぬ。心。の。さ。ぐ。り。後。拾。遺。十。一。つ。ふ
 み。お。ら。有。心。ゆ。ふ。あ。る。み。り。り。る。人。ら。も。し。心。の。ほ。く。ま。江。の
 沿。古。今。十。夕。さ。き。バ。人。あ。る。床。を。持。た。ら。い。歎。ん。為。や。あ。と。り。我
 身。の。同。ニ。春。雨。の。降。ハ。泪。の。櫻。花。を。惜。ま。ぬ。人。し。あ。き。れ。信
 後。拾。遺。三。聞。を。や。れ。そ。の。う。み。山。の。時。鳥。有。し。昔。の。同。じ。聲。の。心
 伊。勢。物。語。白。玉。の。何。ぞ。や。人。の。向。し。時。露。や。答。て。き。れ。ま。し。物。を
 同。た。ら。し。夜。の。星。の。川。辺。の。ほ。く。る。う。も。我。住。方。の。海。士。の。う。く

火。の。古。今。十。君。や。來。し。我。や。行。き。ん。か。も。ほ。え。交。夢。の。現。の。お。や
 の。さ。た。て。の。同。じ。老。ぬ。や。と。あ。や。の。我。身。を。と。た。ぎ。き。ん。老。お。バ
 き。ふ。ふ。り。と。ま。し。物。の。拾。遺。ニ。浮。世。を。バ。そ。む。う。バ。今。日。も。そ。む
 我。お。ん。明。日。も。有。心。ハ。頼。む。信。身。の。古。今。一。浅。み。や。り。糸。ゆ。り
 掛。て。白。露。と。玉。お。も。ぬ。き。る。春。の。柳。の。同。ニ。や。ら。む。信。き。物。や。ハ
 あ。し。ふ。心。の。あ。く。も。ち。る。花。が。ゆ。ふ。ふ。ふ。心。の。是。等。お。て。大。方
 と。辨。言。知。信。し。中。お。ハ。う。の。心。の。お。の。心。あ。る。も。有。事。右。お。出
 ぞ。う。ご。如。し。是。う。の。心。の。あ。の。心。も。や。も。尔。添。し。る。物。お。て。本
 づ。り。め。う。ふ。其。心。を。持。し。る。故。也。猶。う。の。心。の。事。ハ。次。く。云。る。を
 合。き。て。考。ふ。信。し。

春時鳥ホトギスハル春ハルを来て来し鳥トリをシ見ミ拾遺シ何ナニやヤくさの
をシつツいイのおもほえてはハやしく花ハナの名ナこそ忘ワスれ

詞 詞コトバの終ハシふ初ハジメを其ソノ詞コトバの心ココロを強ツヨクうウしむシム辭コトバ也ナリ

願ネガふ心ココロやほみ思オモふハ誤アヤマり古コ今イマ十トたも少オホくクりリをシて玉タマ
とちチま先マや是コトあんンそれやうウつツちみんンらしシ元輔集ゲンポシュウ松マツをの
み引ヒキて帰カヘらば梅ウメの花ハナ思オモふ心ココロの残ノコらラひヒこコしシ後拾遺ゴトシユイ十トあアらラ
むムをシば月ツキうウいイがガふぬヌゆユをシれ我ワカ此コノ世ヨの程ハジメもさサぞゾうウりリぞゾうウしシ
同ドウ村ムラ長ナガしやヤて明アキ交カウやへ有アひ秋アキの夜ヨもまマまマこコしシ楳マキの戸ドぢヂこコ
うウとトぶブふフ大和物語ダイワモノトワリさサも君キミ忘ワスれレをシめメうウしシ鶯ウズの啼ナドをシめメのノみ
や思オモひ出イデげゲ多タ又マタ後撰ゴゼン十トやヤうウしシふフいイもモあアらラじシ云クニ云クニ

やうウルルふフ文字モジを添ソフてもモ云クニりリ又マタ濱松中納言物語ハシマツナカノナノミモノトワリふフいイこコやヤ
やヤ文字モジを添ソフうウもモあアらラりリ

詞 うウふフ疑ウタガひヒのノうウいイりリふフ受ウケくクふフあアらラじシふフ云クニ

ふフあアらラじシふフ類ルイありアリ萬葉マンヤフ叶ハあアもモしシろロをシ野ノとトばバふフやヤをシ古コ草クサ
に新草ニヒクサまマじジゆユおオひヒいイわワつツこコうウふフ古コ今イマ七シチ櫻サクラ花ハナちチりリいイらラもモ
をシ老オホらラくクのノ來キひヒやヤあアらラ道ミチまマづヅうウふフ同ドウ村ムラあアらラじシふフいイらラもモ
雨アメやヤらラあアんン渡ワタりリ川カハ水ミヅまマさサりリあアはハ帰カヘりリこコうウふフ同ドウ村ムラあアらラじシふフいイらラもモ
むムくクのノあアらラじシのノ山ヤマのノ山ヤマ人ヒトやヤ人ヒトもモ見ミるルこコうウふフ山ヤマこコうウふフらラもモ此コノ
類ルイのノうウふフとトうウふフをシみミてテ下シタふフ出イダさサるルこコうウふフいイらラもモ一ヒトツキ物モノ也ナリ
誰タレもモくク思オモふフ事コトあアらラじシふフもモ然シカらラじシふフいイらラもモ切キルるル詞コトバをシ受ウケ

格あるを是の續く詞より受る格ある本より異あり且
 ねふいひみじ古言あるを今の人好み詠
 信くも思ふを疑のらり辞のふや受る物やむ方穂
 ありや云はしむねふの事い下ふゆあり

〇この他の辞やもやの異ふを寒く寒き寒し暑く暑き暑
 し恋し恋しく恋し床し床しく床し或はやう活く類の
 詞やもふのみ限る事あるを先づうめやい
 るあり寒く有暑く有と寒うり暑うりや類ありされば
 其有も詞にして辞ふいあざれば今辞の部ふ加ふほふ
 けらねやありしむめありふひやしく然云別る一のそ

小とその如くありし物あるは爰ふ出きめいおてやむ
 の辞より有や詞受るあれは其群いひやしくらぶれ
 ば心なる大方似しり猶其所くふも云るやほを考ふ
 萬葉ニ吾妹子尔恋を信あうりむねをや朝戸いらを信
 見ゆるきりも同我きふ恋を信あうりむね垣の外ふ
 あぎくふ我しうあしも是等の類也扱宜長の説ふ中昔より
 の詞ふ悲しう恋しうりあやの類ふ云うる云うりや
 云事あるは本是は一やあらむ但彼づらうりい必他の上
 と云時の事あるを是の自の上ふ云て自他の違ひあれや
 も心の通るや云うりや事也彼づらうりも本は是より
 出る物成信しき清濁も自他の上を分つふやあらん

のころころ来鳴やま先叔此ぶぶのニ尔付て論ふは
 我事あり宣長の説ふぶぬの中昔の言尔右ぶ坊ぶぬむこ
 ぶぬ博士ぶぬあや云るぶぬや同じくて兼て其料ふまうせ
 て待心ありぶぬいぶぬみの約まうありや有て大方誰もい
 せも然思言りされやつ〜思ふふもし兼る心ありばら
 文字ハ必清はき理あるふ萬葉集中盛濁音の字と書いれは
 濁る辞あると知はし叔ハ右ぶ坊ぶぬあやの類ふ詞の躰
 とも告ぶぬ渡りぶぬ知ぶぬあやのい叶とぶ〜をや然
 るとつぶぶぬわ〜ぶぬ志るぶぬやうふ盛詞の用とゆ
 受〜ふふ兼の心ふゆらぶ事明らうあやされやぶぬい

もの辞志の辞とゆのみ受る格あるふ思ハ然らぬバつらぶ
 水思ふ人もつるほきれやその本とゆ用のふまもこのゆ心
 もらるる物や見てあ〜むふささ〜いあ〜じや〜あん
 日本紀の訓と據〜して爰ふい出〜つるあり

〇やの部

やハ歎の心とおび又疑の心と持る辞あり其歎の心あり
 いらや相並び疑の心ありハ。や相並ゆりハ。はさやあし
 て軽くやハあ〜ら〜あ〜して重し〜や。やゆのまひぶまハ上
 小既ふ云るぶ如し〜さ〜其置所と〜字〜續く詞より受る
 もゆり譬バ古今九名ありおと〜いぶ〜ら〜や〜ら〜む都鳥わぶ

思ふ人の所りやあしややくあるの常の格成を源氏夕霧小
 あるれともつうふ知てつちをさだんあるや恋しおあきや
 悲しきゆえの類と云也今の俗言ふるは言はあつるが恋しき
 なるし古今あし鴨のささるぐ入江の白波の知交や人を
 く恋むゆの後拾遺汁つふきんはあやふくの春の日や
 夜半のきしあめらうらましうらば詞花十のされく廉のし
 づらむ萩がえの末葉の露のありづの世やあやハ歎のみ

みて疑ふ心のおびと其外浪速津小咲や此花 時鳥鳴や五
 月の 夕月夜さきや園辺のおづめや又菅原やあしな 葛
 城やこのま 志多嶋や大和 神風や伊勢あづめのや又あき
 や鶯 やまやまて 花や蝶や けそぎや早あけ けや
 いさや かしや こゆまや 相坂や あふえ江やあや
 の類もいさやあづの軽さ重きハいさやあも皆同じ事あり
 又古今一谷風ふゆくる氷のむらごやふ赤出る波や春の初
 花後拾遺汁つちあき心空ある我恋や不二の高根ふり
 る白雲同村あぢきあき思ひこそやさつとくや獨や井手
 の山吹の花後撰是や此行も帰るも別まつ 知も知れも

相坂のきき同言の葉小絶ちぬ露の命としやふのりくは君をまじ
 まゆるししは拾遺ハ露の命としやふのりくは君をまじ
 見でやや思ふを悲しうゆき古今三夜やうらき道やまや
 可る郭公我宿としも過つてふあく同五うたし時花待やほ
 尔有し菊うらふ秋尔はらんや見し同叶書らある康ぞ
 鳴ある娘郎花おのづ任野の花やしらたや同叶夢ふは逢
 事うらう成ゆくの我やゆをぬぬ人や。まきうら同叶志とて
 い夢のやを思ふ思ひきや雪ふな分て君と見むゆは是等ハ
 皆疑の心也其用あがる見渡して考ふはしやいの心あるも
 あるいこのの所ふ云るう如し

やえ

やえいこいふ大方同じ古今一春の夜のやみいりやあ
 し梅の花色こそ見えぬ香やいこうくう同ニ吹風を鳴る恨
 みも鶯の我や花み手じふるさう同散花のあくあし留
 る物あう空我うかいさふおゆらましやい同ハ限あき雲井
 のとそふわうらう人も人を心ふおらうさむやい同ニ桜花春
 くさくさうらう年じあも人の心ふおらうさむやい同ニ大和物語心
 さく先不吹風尔やいあびくほき野分過し君あやいあ
 ぬ又古今叶世の中い昔うらやいううのきん我身はゆつ
 為ふあまうう後拾遺ニあみづやい亦もらうほきつまあ
 んあくうの外のあぐさまぞれきあまうい唯のやの心のやい

ある事らの心のくは同じ

やぞいやのあぶらうあるふぞのきまらう心添ヒも
物と問トヒつゐるやうの心ゆふと後撰九をのあくと同じ
心ふありふしと思ふとぐうい思ふらむやぞ好忠集世の中
とらしゆらひそぐ片時カタトキも有経アリヘあんやぞ忍シぶまばこそ

やらんいやゆらんや上下ふ有アルは辞ハあると一ヒトツトコロ所へ
合アはる物あや古フルい無事也ナキ今俗言イマソコトふ何ナニやら彼カやあや
らんらんのちちあまうりあや千五百番哥合谷チヒトイハヒヤぐと木キの葉ハぐ下のシタいれ水
氷ヒぎばやらむ音ネつつともきね丈木春の野ふ多タご手テふうきそ
行賤ユクシツのたぶあややらむ物あやきある

やもいやふ歎ナキのもの添ヒるあや唯タカやゆユ云イふ異コトある事
無ナキもゆり又やらの心ふ云イふもあり萬葉三爰マンあして家イやも
ゆづと白雲のいあ引山ヒキととらえて來キふきり同ドウこもゆくのん
ちをチを先サキが手テふまきる玉タマハみみはれて有アリやもやも同
四空シウクウちちのたやもふいゆゆくく云ク同ドウ六ロクとめめこやもむあししの
るるゆゆ云ク云ク

やあいやや歎ナキまま上ウふ又歎ナキのああと添ヒるあて丈木
集ツふ嬉ヒしやあやいふ事見ミええゆ好コトししううね辞チ云ク云ク信シし今
の俗言ソコトふい恋コイしやあ悲カナしやあれれ常ツネふふいいふふ歎ナキののふ
又歎ナキのああををそそ言イててゆゆああ云ク云クふ理コトワハ同ドウじややああききも心

ハ同じうらまふ家の野や引合を見らばし

○水の部

水ハ切了詞の間ト長ふをきまりて用とあそ辞也ささば其上
 下の詞ふりりて心異ト下あるが如聞ト下ゆるあり次の歌やもふて
 其大方ソノオホカタと辨ト下ふべし古今三足引ト下の山時鳥ト下をりて守て誰ト下らま
 さる音ト下をのみぞ鳴ト下同耳ト下志草何ト下をの種ト下や思ひしハひきか
 ず人の心ト下也きり同三暮ト下るころや見きバ明ト下ゆる夏の夜ト下をり
 らぬや鳴山郭ト下公後撰ト下十のりありしやいふころのい嬉ト下しき
 せおろころありしや見ト下えありし思ト下ふ貫ト下之集來ト下しや思ト下ふ心ト下え
 あきとさくら花ト下さるやまづふふさる也ト下きり古今三夏ト下

○言靈のきるべ

秋ト下行ト下ふ空ト下の通ト下い路ト下ハころ守涼ト下し又風ト下や吹ト下らむ同五我
 來ト下りる方ト下も考ト下らむさくら山木ト下の木の葉ト下の叢ト下やまづふ
 ふ新古今ト下ハ流ト下き木ト下立白波ト下やぐ塩ト下やいづせうかト下らむ
 しつみの底ト下古今五ト下やありも出ト下ぬ山田ト下ともるや藤衣ト下稻葉ト下の露
 ありきや日ト下をれや同八物思ト下ふや過ト下る月日ト下も知ト下らぬまふ今
 年ト下も今日ト下ふらむさぬやト下きく同廿老ト下ぬやト下何ト下やト下我身ト下とせ
 免ト下ききむ老ト下ふト下今日ト下ふらむをまし物ト下の新後撰ト下ニ何ト下やト下うくあ
 じふある花ト下の色ト下としも心ト下ふ深く思ト下ひ初ト下きむ後拾遺ト下十ありて
 ころく雲ト下づくころうひうくさうや能ト下やト下ふさるる月ト下もある世
 尔此ト下ころほふも出ト下ぬ山田ト下と守ト下やト下いふりり下ト下なるハ今ト下の

ありきり

〇尔の部

尔の總て其物其事尔らの添ふが如き心をおびて慥あら
 しむる辞ありてや相並びてあきおしおきりてきてしてき
 わあや同じ心尔用わたり猶此事の部の部尔委しく云るを
 考可合を信し又いや相對了る事の既尔との所お云るを
 其もをわらぶちるめて種く尔聞ゆるもあるの上尔も次
 次云る不同じ古今ニ花の色へ移れおきりれいづら尔我
 身世尔ふるあがらんまふ同叶支をさる思ふ事やてまが
 ややと見きやあひいそ人のきうくふ同誰とも知人尔を

高砂の松もむのしの友あらあふ。同十浅ぢふのをのく
 篠原志のふやも人知ら米やいふ人あしふ。同ニやぐむ信
 物やいあしふ。ちうあとも散花ごふふ。いづふ心う新古今ニ
 春雨のいいさあありそさうら花まご見ぬ人尔。ちうまも
 とし古今叶逢まごのころいみも今い何ちん尔。見ても心のあ
 びさるあふ。後撰叶何まひふ。すいの見る目を思ひきんお
 きる玉もをうづく身おして板又風雅一櫻花いびや毎尔。
 手折もる伴尔。千年の春尔。挿む玉葉四又秋の愁の色尔。向ふ
 あり尾花づ風尔。庭の月影此二首の春尔。云風尔。云云の如
 きふい古くの聞え又一種萬葉叶見をやうふ。きん同を

是の誰もろく知まらざりし事あつら總了の詞のいふ事と
 添へたる事多しゆきまもまもまもまもまもまもまもまもまも
 多し雖の字のいふ事もの訓あるもおのづから添へたる習
 了る故あり雖のいふ事あつて雖言の二字をこそいふ事もの
 訓の理あるといふ事いふ事いふ事いふ事訓來まらもて總了
 辞のいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
 一春過了復來まらし白妙の衣ほしり天の香久山あり
 持統天皇の御製歌と小倉百首の衣ほしり天の香久山あり

まらるの唯衣ほを天のうら山ありいふ心ありていふ軽く添
 へる物ありまらと此御製歌の心違ふゆゑ誰もろくいふ
 くまらまらい中くいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 詩のいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
 る花を思ひ知らまらもまらまらまらまらまらまらまらまら
 あやふ春雨のちり出つて鳴鶯の聲同五道ありてまらまら
 しつら降雪の消へきぬまらまらまらまらまらまらまらまら
 こふして過るし方と過るまらまらまらまらまらまらまらまら
 續後撰一冬きりい衣をまらまらまらまらまらまらまらまら
 のうら山新撰朗詠まらまら火のまらまらまらまらまらまらまら

されぬの廣くつゝ狭し故ふつゝゆゑあはき所をてぬ
 いづれもてぬゆゑあはきをてぬゆゑあはき
 多し譬は音ふ聞て恋するゆゑあはき然音ふ聞て後ふ恋
 渡るゆゑあはき又音ふ多し恋渡るゆゑ同時ふ相交るゆゑ
 あり然るを音ふ聞て恋するゆゑあはき音ふ多し同時ふ相
 交ふゆゑあはき辞ふて先音ふ聞て後ふ恋渡るゆゑあはき
 總つゝ此心ありゆゑあはき事あれゆゑあはき且くの
 を略する詞ありゆゑあはきゆゑあはき也つゝの辞を
 重ねる物ふそゆゑあはき又あはきの心のつゝあはきの心のつゝ
 あはきやふ分るゆゑあはき人もあはきもあはき種々の心ありあはき

ゆゑあはき其用ありゆゑあはき心異ふ聞ゆるゆゑあはき也
 古今四物ゆゑあはき秋をうれしきもあはきつゝあはきゆゑ
 限りゆゑあはき同山里の秋を殊あはきしきと廉の鳴音ふ
 目をささしつゝ同二ゆゑあはきつゝあはきを年ふる偽あはきゆゑ
 心と人の知らあはき同月夜ふあはき來ぬ人あはきつゝあはき
 雨もあはきあはきあはきつゝあはき同一君あはきあはき春の野ふ出
 若菜摘るゆゑあはき衣手ふ雪の降つゝ同山ざらら我見ふとと春
 づきみ峰あはき尾あはき立つゝあはき大方是等あはき辨ふゆゑ
 猶もあはき佐つゝあはきあはきつゝあはき降つゝあはきあはきつゝあはき
 つゝあはきのあはきつゝあはきあはき心ふ見まはきあはき聞え安し

づゝの物をとをらるる詞の間ヒトカふをさまめて用とあを事辞エテ
 あらざるも辞エテ近チカし伊勢物語鳥の子トリノコと十トづゝ十トの重カぬ
 けもおもえぬ人ヒトを思ふものういあやの類ヒトリ一人ヒトづゝあアり
 づゝツあア常ツネあもイ云イ異イあアる事コトあアり古持チ繪エ卷マキの詞書ヒトカふ錦ニづツ
 見ミえエるルもモ此コノづゝツあアらん
 らラ猶ナカらラうウむムづツあアらん

言靈のちりべ中篇上終

